

シンポジウム 哲学研究の比較

「哲学の歴史は哲学的に意味があるのか？——哲学史研究の方法、評価、教育」

馬場智一（長野県短期大学）

本シンポジウムでは、分析哲学、哲学史、現代思想という三つの領域が、哲学研究の方法として比較検討された。報告者は、このうち哲学史研究を担当し、その哲学的意義について、より正確に言えば、その意義についての主張にはどのようなものがあり得るかについて検討した。

哲学史研究は、哲学研究のアカデミックな一形態として確立されている一方、その哲学的意義の有無を巡っては批判的な意見も多くある。重箱の角をつついているに過ぎない、哲学研究ではなく作品・作家研究にすぎない、などである。

ではこうした意見に対して哲学史研究の「哲学的意義」を主張することができるだろうか、できるとすればどのようにできるだろうか。本発表はこの問いに答えるために、まずは「哲学史研究」という表現が含意するものについて予備的考察を行った。また同時に、「哲学」についてのごく一般的な定義として「自明性の問い直し」やそれに由来する「現実への驚き」も確認しておいた。こうした定義が個別の哲学史研究にもあてはまるのであれば、冒頭の批判を免れることができることになる。

他方、過去の哲学者の研究が、哲学史研究というよりは優れて哲学であると認められるケースもある（石黒ひでのライプニッツ研究など）。これは過去の哲学者を「同時代人」として読むものであるが、それでも何らかの歴史的（哲学史的）知識がなければ過去のテキストを読むことはできないであろう。その意味で哲学史は「必要」なのだが、逆に言えば、哲学史は哲学の補助的手段にすぎないことになる。

この命題に対しては、次の二つの解答がありうる。(1) 哲学が繰り返してきた普遍的な問いの解明に、哲学史研究はなんらかの貢献をするに過ぎないので、補助的である。極端に言えば哲学史研究を全く前提としない哲学的研究もありえる。(2) 哲学の歴史への問いかけそのものが自明性の問い直しになるので、補助的でない。むしろあらゆる哲学的問いにとって哲学史的探究は不可欠である。

いずれにせよ哲学史研究が哲学にとって少なくとも補助的な意義を持ちうることは多くの哲学者にとって同意しうる事実であろう（もちろん、それさえも持ち得ないという、ラディカルな立場もあり得る）。問題は補助的な意義を越えて本質的な意義をもつことがあるかどうか、あるとすればどのような場合なのかである。

一般的に言えば、問いかけられている問いの内容によって、解答が(1)となるのか(2)となるのかは異なる。たとえば言語や論理についての哲学であれば、(1)の立場を取る人が多いように思われるが、「市民社会」とか「公共性」について哲学するのであれば(2)の立場を取るのが自然であろう。ただし、報告者としては、それぞれの選択が必然的かどうかについては議論してみてもよいのではないかと考えている。

質疑応答に際して、報告者は哲学史研究がエスタブリッシュされた見方を転覆させる魅力を強調した。このように強調すると、哲学史研究者が「問いを大事にしていない」かのようにみえるかもしれない。実際は、報告者の「問い出し」のプロセスが、多くの場合、固定化した歴史観ないしは歴史の忘却に対する問いかけを出発点にしているということにすぎない（むしろそうではないこともある）。他の登壇者

やフロアとの対話はこのことを改めて報告者に認識させた。

分析哲学や現代思想にも関心を持ち続けているものとしては哲学史研究に閉じこもるつもりはないし、今後も相互に問いを投げかけあってゆきたいと思う。今回のシンポジウムは大変刺激的で、多くを学ぶことができた。他方、議論を通じて次のようなこともぼんやりと感じた。すなわち、歴史を忘却させ誤った対立を上演しがちな世界にあって、歴史を掘り起こそうとする構えの意義をなんらかの形で訴えかけることが、いま、哲学史研究に従事する人間にも求められている。哲学史への批判が深いところで意味するのは、哲学史研究者がそのような問いに各々の仕事によって答えられるかどうか、試されているということではないだろうか。